

芦屋市立美術博物館

美博だより

Ashiya
City
Museum
of
Art &
History



山田正亮〈Work C-75〉
1960年、油彩・布
100.0×65.2cm

多彩なストライプの反復の中に垣間見える、絵具の表情。ただ塗っているのではなく、絵具の垂れなど偶然の作用も絵の味わいとして受け入れながら、画面を統制しようという山田の意識が貫きます。「塗る」ことが「描く」こととなるための、画家の意識です。

展覧会報告 2-4

- 植松奎二 みえないものへ、触れる方法 ― 直観
- スポーツ展～芦屋・阪神間のスポーツの歴史と未来～
- コレクション展「絵画はつづく、今日にむかって」
- 限らない世界 / 村上三郎
- 歴史展 芦屋の歴史と文化財展
昔のくらし展
- 第39回 芦屋市造形教育展

展覧会紹介 4

第66回 芦屋市展

研究ノート 5

伊藤継郎旧蔵資料からの一考察
新制作洋画研究所

学芸員コラム 6-7

- 創造の場としての美術館
― 芦屋で制作ワークショップを行う意味―
- 江戸時代の芦屋をのぞいてみる

館藏品紹介 1,8

植松奎二 みえないものへ、触れる方法―直観

2021/3/13～5/9（4/25～5/9 臨時休館）

大阪とデュッセルドルフを拠点に、国内外で活躍する植松奎二氏の展覧会を開催した。国内の美術館では15年ぶりに開催される個展である。本展では、これまでに発表した立体、彫刻作品や70年代の写真作品とあわせ、過去最大級の大きさとなる新作のインスタレーション作品や新作のドローイングなどを展示した。過去の作品と新作を展示することで、植松の作品の核となる部分や時代と共に変化していく様相も辿ることができ、未来への展開を想像させてくれる内容となった。本展は、コロナ禍による地域間の移動に自粛体制がとられていた時期の開催であったが、開幕時より多くの来館者を記録するとともに、関連イベントは定員を超える来場者数となり、植松奎二という作家や作品に対する興味・関心の高さが窺えた。

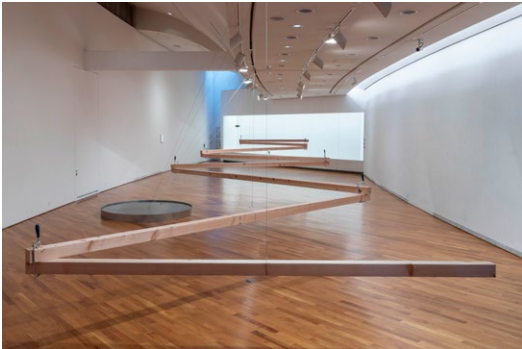
多くの来館者を迎える本展であったが、3度目の「緊急事態宣言」（4/25-5/11）の発令を受け、4月25日から臨時休館となり、休館中の5月9日に閉幕した。休館中には、会期延長や他館での巡回の可能性などの問い合わせが相次ぐとともに、展覧会記録の動画配信希望の声も多く寄せられた。これらの声に応えるべく、展覧会場やイベント等を撮影した動画をベースに編集作業を行い、本展の閉幕日にクロージングイベントとして、当館公式YouTubeチャンネルで記録動画等のインターネット配信をおこなった。本動画は、世界で活躍する植松奎二氏の作品や記録動画の活動への理解を深める強力なツールになったとともに、当館の活動への注目と理解を深めていただく手立てになったと感じている。また、文化庁の助成によって、会期中に開催した植松奎二氏と光田由里氏の対談の記録動画や、彫刻家・植松奎二を紹介する動画も公開することができた。

不意の中での途中閉幕ではあったが、様々な方々からの協力によって、本展をデジタルアーカイヴとして後世に伝えることができたことは幸いであった。

彫刻、写真、インスタレーション21点、映像作品14点
（大槻晃実）



展示風景 撮影：守屋友樹



《見えない力―軸・経度・緯度》2021年 撮影：高島清俊



芦屋市立美術博物館 公式YouTube

スポーツ展 ～芦屋・阪神間のスポーツの歴史と未来～

2021/5/29～8/29

芦屋市にゆかりのあるスポーツ選手や人物、団体をはじめ芦屋が育んできたスポーツ文化を紹介した展覧会。元芦屋市長でハンマー投げ・砲丸投げの元日本記録保持者、学生横綱だった猿丸吉左衛門や、サッカージャーナリストの賀川浩、テニスの国際化に貢献した川廷榮一、県立芦屋高校野球部などの貴重な資料とともに紹介した。他、西宮ストークスや阪神タイガース等の近隣プロチーム展示や、兵庫県にゆかりのサッカー日本代表選手のユニフォーム展示なども行った。

また、様々なスポーツに関するイベントも開催。市内で盛んな「なわとび」「ダブルダッチ」の体験会や、デカトロン西宮店協力のアーチェリー・ペタンク体験会、ミキハウスとNODAレーシングアカデミー協力のフォーミュラカー乗車体験会。スポーツ・ニッポン新聞社編集委員で関西の野球文化に詳しい内田雅也氏による講演会、Jリーグクラブ等で選手育成を務めた芦屋市出身の祖母井秀隆氏による講演会、森上亜希子氏、中村藍子氏の元プロテニスプレーヤーによるトークライブなどを行った。

（室井康平）



トークショーの様子（テニストークライブ）



カヌー展示の様子



西宮ストークス展示

コレクション展「絵画はつづく、今日にむかって」

2021/9/18～11/21

小出楢重から具体美術協会まで、近現代「絵画」の名作たちをコレクションの核に持つ当館。開館30周年の節目に今一度、「絵画」に正面から向き合う展覧会を企画した。キーワード「モチーフ」―描く対象、動機、主題、構成要素―にそって、なぜ絵を描くのか、何が良い絵なのかという画家の探求に迫った。

プロローグと1～3章で構成。「プロローグ 絵画の成り立ち」では平らな面に絵具が載るという絵画の物質的な側面に注目し、画面をよく観察してもらう。また、美術史や制作の現場にて語られてきた、絵画にまつわる10のキーワード（色彩、空間、…）を紹介。第1章「描きとめる一眼の欲望と手の仕事」、第2章「絵をつくる―モチーフの操作と構成」にかけ、見たままを描くことから、次第に画家の意識的な操作が進み抽象化していく過程を展観した。第3章「描くこと、そして見ることへ」では、絵具や素材を独自に扱い新しい表現を目指した画家たちの抽象絵画の大作群、それを見る鑑賞者の眼差しのあり方を体験していただいた。

今回は配布式の「鑑賞の手引き」に画家の言葉や解説を記載。先入観なしに作品と対面したあと、鑑賞者が自由なタイミングで手引きを読むスタイルを試みた。アンケートによるとまず作品だけを見、2周目で解説を読みながらという段階的な楽しみ方につながったようだ。また制作時の画家の年齢をキャプションに示し、画家の試行錯誤の姿を身近な存在として感じていただくことを目指した。具象から抽象という絵画史の流れとともに、「絵画の見方」をお伝えできていれば嬉しく思う。

（川原百合恵）



展示風景



展示風景（具体美術協会関連資料）

限らない世界 ／ 村上三郎

2021/12/4～2022/2/6

没後25年の節目に、具体美術協会（「具体」）の中心メンバーとして知られる村上三郎（1925-1996）の個展を開催した。代表作の〈紙破り〉だけではない、村上三郎という一人の作家を多角的に紹介したいと考え企画したものだ。

1955年第1回具体美術展で、ハトロン紙を体当たりで突き破る作品、通称〈紙破り〉を初めて発表した際、壁面に展示した〈紙破り〉も存在していたことから、絵画行為の延長という意識が見られることに注目し、村上と絵画の関係を考えることからスタートした。

1955年から1994年にかけて約40回にわたり行われた〈紙破り〉の歴史をたどるアーカイヴ展示をプロローグに、「出発／新制作協会の時代 1943-1954」「探究・追求／具体美術協会の時代 1955-1972」「回帰／個展の時代 1971-1977」「絵は自由／美術教育 1950-1995、芦屋市展 1952-1994」の4章から構成し、作品約60点と関係資料約300点から約50年にわたる村上の多彩な活動を紹介した。

会期中には、具体美術協会など戦後美術を研究している平井章一氏（関西大学文学部 教授）、1996年に芦屋市立美術博物館で開催した村上三郎展を企画した山本淳夫氏（横尾忠則現代美術館 館長補佐兼学芸課長）、村上三郎作品の修復を手掛けた横田雅人氏（修復家）の3名に「村上三郎」の作品論、芸術論をお話しいただいた。本展を介して、「具体」や〈紙破り〉といったこれまでのイメージを大きく超え、作家「村上三郎」をご覧いただけたと感じている。

（大槻晃実）



展示風景



左 《あらゆる風景》1956／1993年
 右 《箱》1956／2001年 いずれも個人蔵

Ⅰ 芦屋の歴史と文化財展 2021/3/13～11/21（4/25～5/9 臨時休館）

今回の展示では、国指定史跡となって10年を迎えた会下山遺跡の特集展示を行った。当館でこれまで展示していた資料に加えて、三条文化財整理事務所の資料も展示。会下山遺跡の発掘当時の様子や、これまでの歩みを写真や年表などとともに紹介した。また、徳川大坂城東六甲採石場400年を記念して、市内の岩ヶ平刻印群付近から出土した備前焼などの陶器片、鉄滓などの採石を担当した大名が持ち込んだと思われる資料も展示した。



指定10周年 国指定史跡・会下山遺跡特集展示



徳川大坂城東六甲採石場特集展示

Ⅱ 昔のくらし展 2021/12/4～2022/3/27

今年の昔のくらし展では、「暮らす」「食べる」「遊ぶ」の3つのテーマに沿って展示を行った。「暮らす」では、冬、夏で使用する季節の道具をはじめ、蓄音機や映写機、ブラウン管テレビなどの懐かしの道具を紹介。「食べる」では、ちゃぶ台などの食卓の様子や、羽釜、炊飯器などの調理で使う道具の変遷を紹介。「遊ぶ」では、関西を中心とした郷土玩具や、ブリキのおもちゃなど、懐かしの道具たちを展示した。



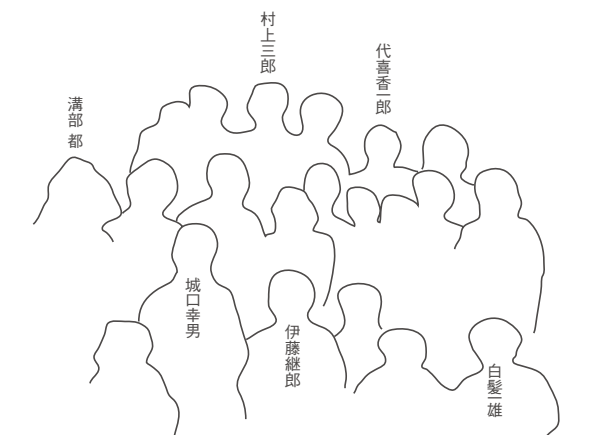
展示の様子



①岡山にて 1950年代初め



②伊藤継郎のアトリエにて 1955年頃



「伊藤継郎旧蔵資料からの一考察 新制作洋画研究所」

が写っていました。同じ時に撮影された別カットの写真には白髪一雄も写っているため、白髪が伊藤のアトリエへ通いだす1950年春以降の時期の写真と考えられます。新制作洋画研究所では、宴会やクリスマス会、写生旅行などが開かれていたようで、本写真は彼らの交流の一端に触れる資料といえます。

一方、1955年頃と考えられる伊藤のアトリエ内で撮影した集合写真(②)では、伊藤、村上、白髪、城口、代喜香一郎、溝部都たちが写っていました。

村上、白髪、城口は1951年に結成されたグループ「ジャン」のメンバーです。西村や網谷ら新制作協会の若手の画家たちが参加した「ジャン」は、勉強会や研究会を開きながら大阪や京都で展覧会を精力的に開催しました。一方、代喜と溝部は、村上や白髪、金山明と共に活動した「0会」のメンバーです。1954年に結成された「0会」は新制作協会で先鋭的な活動をしていた画家が集い、批評会などをおこなっていた研究会の性格の強いグループでした。例会には、田中敦子や嶋本昭三なども参加しており、後に具体美術協会と合同例会を開くようになりました。これを機に、村上、白髪、金山、田中らは、1955年より「具体」に入会し、活動することとなります。

作品を持ち寄りメンバー同士で批評会等を行っていた「0会」の活動に関心をもっていた伊藤が、白髪たちに展覧会をしてみないかと声をかけたことで「0会展」(1954年、そごう百貨店ショーウィンドー・大阪)が開催されました(❶)。本展では、村上が《投球絵画》を発表し(❷)、白髪は初めて足で描いた作品を出品しており(❸)、重要な展覧会の一つとして記録されます。

伊藤のアトリエに設けられた新制作洋画研究所は、小磯や伊藤らのもとで絵画制作の研鑽を積む場であったとともに、若手の画家たちが同志に出会い、それぞれが目指す美術へと邁進していける、自由に思考を交感できる開放的な場所でもあったのです。

大槻晃実

註 ❶ 「一度だけ大阪の御堂筋のそごうのショーウィンドーを借りてやりました。伊藤継郎先生がそごうに頼まれましてね。それで僕らに「そごうがやってくれと言うて来てんねけど、君ら新しいことやっとなねんやったらそこでやってみたらどうや」と言われてやったわけです。何となく0会をやっていることは公認されていたんですね。」「絵を始めた頃のこと、など(―元永定正・白髪一雄氏に聞く―)」(聞き手：三木哲夫)『元永定正・白髪一雄展』、和歌山県立近代美術館、1984年、pp.33-41
 ❷ 芦屋市立美術博物館編「具体的な話 村上三郎VS.白髪一雄」(司会：塚村真美、1993.1.24)「具体展I・II・III」、1994年3月、p.204
 ❸ 「その時に初めて足でべたべたと踏んだような作品を出品しました」「白髪一雄氏インタビュー」(聞き手：山村徳太郎・尾崎信一郎、1985.7.10)「具体資料集―ドキュメント具体 1954-1972」、芦屋市立美術博物館、1993年11月、p.379

第39回 芦屋市造形教育展

2022/2/12～2/20

芦屋市内の幼稚園・保育園児、小学生、中学生の図工作品を展示する芦屋市造形教育展を2年ぶりに開催。数多くの力作が、美術博物館内に展示された。

(室井康平)



展示の様子

展覧会紹介

第66回 芦屋市展

2022/3/8～3/27

1948年の第1回から「何人でも随意に応募することができます」と、応募者の年齢や居住地域などを限定しないことが特徴です。創立当初から具体美術協会のリーダー吉原治良や新制作協会の伊藤継郎、写真家の中山岩太やハナヤ勘兵衛らが審査に携わり、表現の新しさや独創性を大切に、多くの作家を輩出してきました。世代や表現の垣根を超えた交流の場、新しい表現が生まれる場となることを目指して開催します。

(川原百合恵)



第65回芦屋市展会場風景

創造の場としての美術館 ―芦屋で制作ワークショップを行う意味

今年度のコレクション展「絵画はつづく、今日にむかって」では、展覧会や作品への理解を深め、表現活動に親しんでいただくことを目指し、以下3本の制作ワークショップを開催した（：以後は実施日と対象者）。

- ①「動きを描く ―ダンシング×クロッキー」
：10月9日（土）、高校生以上
- ②「美術館の絵画教室 ―りんごがひとつ」
：11月7日（日）、小学生以上
- ③「絵の具とあそぶ ―抽象画に挑戦」
：10月23日（土）、小学生以上

①は画家・岸本恵美子氏とダンサー・伊藤愛氏の共同企画による。ダンサーが躍る様子をすばやくスケッチし、無心で手を動かす楽しさや、自分の意図をこえて画面に現れる線の面白さを味わう。②と③は様々な画材や技法によって、具象的・抽象的な絵づくりを体験するもので、絵画制作を学び現在も継続する筆者が講師を務めた。

これらの教育普及活動は展覧会の鑑賞のツールの1つであり、また来館者の層を広げることにもつながる（①は大人、②③は小学生を中心に、いずれも定員を超える参加申し込みをいただいた）。本稿では今回の展覧会におけるワークショップの実践を踏まえ、美術館で行う制作ワークショップの性質と、地域の美術館として芦屋に位置する当館が実践する意味を考える。

1 美術館における制作ワークショップの性質

ここでは3つのポイントを挙げたい。まず1つ目は、ワークショップがすべて作品に始まり作品に終わるということ。参加者がワークショップに取り組む「動機」とその「成果」が、どちらも美術館の作品に根差しているということである。今回もはじめに、展示室の作品を参加者全員で、対話も交えて鑑賞し、画家の描き方や画面上の絵具の様子を観察した。そしてワークショップの制作に用いる技法・画材も、作品に使われている、もしくは作品から発想できるものに限定した。

2つ目は、参加者同士の交流によって、一種の共同制作のような側面が生まれること。制作時間の途中と最後に、参加者たちが互いの成果を見合う時間を設ける。描き方や画材の情報交換、互いに真似してみようという雰囲気を生み、のちの表現の幅を広げたいという意図がある。

3つ目は、美術館ならではの臨場感が得られること。作品の実物を間近に見ることができるほか、展示室などの空間の性質も関係する。①のワークショップは当館の吹き抜けのエン

トランスホールにて、コントラバスの生演奏のもと実施した。当館ならではの空間に展開するダンサーの動きは「動くものを描き留める」という、絵を描く者の根源的な欲求を導く、しかし自力ではなかなか実現しにくいモチーフであり、当初の定員の倍以上の応募があったほか、継続を希望する声が多数あった。②と③のワークショップでも、絵画作品の生々しい質感に直面したあと、その内実に近づく方法として「絵具をたっぷり惜しみなく使うこと」を筆者から参加者に念押しした。筆者の経験則として、絵具をたくさん使うことが絵画の完成度を大きく上げることがあったのだが、参加者からは絵具を惜しみなく使えるということ自体を喜ぶ声が多数寄せられ、満足度を高める要因となった。

以上3つのポイントを挙げたが、この前提には、当然のことながら、美術館が作品の実物を所蔵し展示する場所である、ということがある。過去の表現者の作品が展示される空間で、（ときに現役の表現者とともに、）ワークショップの参加者が次の表現の主体となるのである。過去の作品たちを楽しむ場としてだけでなく、次の作品を生み出す創造の場として機能するというのが、美術館にてワークショップを行う本質なのだと考える。最後に、当館でのワークショップの実践が、芦屋という地域の美術館としてどのような意味を持つのかを、当館や芦屋の美術の特色をふまえて考える。

2 当館にて制作ワークショップを実践する意味

当館のコレクションの柱の1つに、芦屋発祥の前衛美術集団「具体美術協会（具体）」の作品群がある。リーダー吉原治良の掲げた「人の真似をするな」「今までにないものをつくれ」という信条は、吉原や後のメンバーが審査を務めた公募展「芦屋市展」（1948年-）にも通底していた。芦屋市展は創立当初より年齢や居住地を問わず「何人でも」参加できる、全国的にも珍しい公募展である。具体の精神によって、固定観念にとらわれない自由な表現が歓迎され、具体のメンバーら多くの表現者を輩出した。また同様に具体のメンバーが審査等を担った「童美展」（1948-2008年開催）でも、子どもの生き生きとした表現が、巧い拙いという価値観からはなれて大切にされてきた。このように芦屋の地には自由で生き生きとした表現を歓迎する土壌が戦後まもない頃から培われており、これを裏付けするのが、当館が有するコレクション作品なのである。だからこそ、当館のコレクション作品を活用した制作ワークショップは、どなたでも楽しみ創造に触れられる機会となるのだろう。

自由で生き生きとした創造性を大切にする土壌をもつ芦屋の当館が、ワークショップ等の教育普及活動によって「創造の場」としてあること。博物館や美術館の存在意義が問われて久しいが、その問いが現実問題として生々しく議論された過去もまた、当館は有する。この存在意義を高めるひとつの重要な要素であり可能性が、教育普及活動には秘められている。

川原百合恵



③「絵の具とあそぶ ―抽象画に挑戦」
実施風景

江戸時代の芦屋をのぞいてみる

この写真は『摂津名所図会』という資料で、1796（寛政8）年に発行された書物です。「摂津」（❶）における名所旧跡を紹介しており、現在でいうならばガイドブックといえるでしょう。編集者は秋里籬島という俳人で、この書物より先に出版した京都（山城）を中心に紹介した『都名所図会』が好評だったことで、近畿地方を中心に紹介した名所図会が出版されることとなりました。上記地方以外にも『東海道名所図会』、『木曾路名所図会』も手掛けています。

話を『摂津名所図会』に戻しますが、以下の特徴があげられる書物となっています。①現地の地理に基づいた挿絵と文章、②複数の人物により描かれた挿絵があげられます。①については、秋里自身が絵師とともに各地を回って現地を見聞し、②については、名所図会を数多く手がけた大阪の絵師・竹原春朝斎を中心に、多くの絵師が挿絵を担当しました。

そのようにして、全9巻12冊（❷）で摂津国の名所がまとめられました。摂津国の名所を取り上げて紹介するのも非常に面白いのですが、字数が限られている事もあるので、芦屋を中心に江戸時代の景色をのぞいてみましょう。

まず、①の挿絵をご覧ください。打出浜、阿保親王墳、金津山、親王寺とあるように、芦屋市東側、打出地域を描いた挿

絵とわかります。金津山とは、現在、芦屋市文化財に指定されている金津山古墳のことを指します。挿絵では、円墳の様に描かれていますが、現在では、発掘調査によって前方後円墳である事が判明しています。この書物には、「金津山」という名称は、阿保親王が黄金をここに埋めたという伝承から来ていると記載されています（❸）。

②の挿絵を見ると、川を挟んで木々が見えますが、これは現在も変わらぬ松林が連なる芦屋川になります。芦屋川の東岸には、小倉百人一首に登場する猿丸太夫の墓があります。現在、芦屋川付近にある猿丸太夫の子孫とされる、芦屋神社の境内に猿丸太夫の墓と伝えられる石塔が存在しています。猿丸太夫の詳細はよく判っておらず、この書物にも、猿丸太夫に関する伝承を引用しながら、詳しい事は不明と記されています。

最後に、挿絵の中で東西を横断している細い道は、西国街道です。現在も市内には、西国街道の名残がありますが、当時は、西日本の大動脈でした。

読み物としての面白さだけでなく、地図としてその地域の様子が浮かび上がってくる表現力は、まさに一級品の資料といえます。

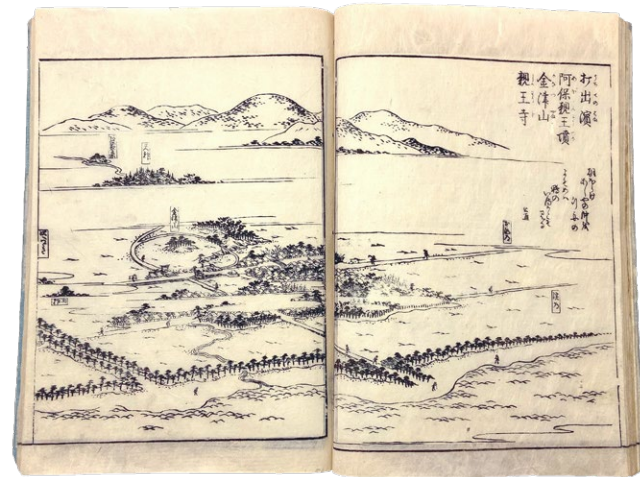
室井康平

7

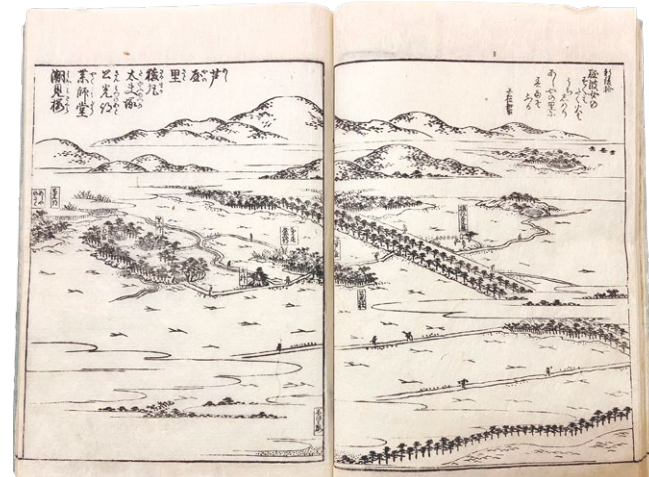
❶ 摂津国の範囲は、大阪市（鶴見区、生野区、東住吉区、及び平野区の一部は河内国）、淀川以北の大阪府域（高槻市の檀田地区を除く）、兵庫県南東部（北限は三田市、西限は神戸市（垂水区及び西区全域、北区及び須磨区の一部を除く））

❷ 江戸時代当時の摂津国は、全12の郡で構成されていた。島上郡、島下郡、豊島郡、能勢郡、河辺郡、有馬郡、武庫郡、菟原郡、八部郡、西成郡、東成郡、住吉郡。芦屋は菟原郡に属した。なお、1896（明治29）年に菟原郡は武庫郡に吸収合併されます。

❸ 阿保親王（792（延暦11）年～842（承和9）年）は、平城天皇の第一皇子。平城太上天皇の変（薬子の変）に連座して大宰権帥へ左遷。父の崩御後に入京を許されて朝廷に仕える。承和の変を未然に防ぐ功績もその直後に急死。子に在原業平ら。尚、市内に所在する阿保親王塚古墳は4世紀前半の造営であると考えられており、親王が存命だった時代と整合せず、被葬者は別の人物と考えられます。



①『摂津名所図会』1796（寛政8）年 芦屋挿絵 芦屋東側



②『摂津名所図会』1796（寛政8）年 芦屋挿絵 芦屋西側



①「動きを描く ―ダンシング×クロッキー」
実施風景

伊勢物語画帖 1帖 紙本着色墨書 江戸時代

狩野探雪(1655-1714)の筆による伊勢物語の39場面が描かれた画帖。見開きで、場面の絵とともに公家の筆による歌が施されている。装丁には三葉葵の紋があり、徳川家に連なる婚礼調度品と考えられている。

上:伊勢物語画帖 画帖全体

下:伊勢物語画帖 87段 漁火の場面



2022年度の展覧会予定

2022.4/16～6/19 北原照久コレクション展 ―おもちゃ! 広告! 驚きと感動と心温まる物語―

同時開催: コレクション小企画「美術の手ざわり―記憶にふれる」(仮称)

【休館のお知らせ】

2022年7月1日(金)～2023年3月31日(金)まで、当館は「機械設備等改修工事」のため、休館予定です。

2023年4月上旬開館予定につき、改修後の開館予定につきましては当館ホームページ、twitterをご参照ください。

美術博物館ホームページ <https://ashiya-museum.jp> | Twitter @ashiyabihaku

芦屋市立美術博物館 〒659-0052 兵庫県芦屋市伊勢町12-25
Tel:0797-38-5432 Fax:0797-38-5434

美博だより 2022年3月4日発行(初版第1刷)
発行者 芦屋市立美術博物館